

郷土の

偉人

刻苦して博士になった 吉田 熊次

わが国教育学の育ての親とも言われた文学博士吉田熊次は、明治 7 年中川村日影^{ひかげ}に生まれました。川樋小学校を卒業すると、宮内小学校高等科に入学し、下宿生活を始めました。下宿では冬でも足袋をはかず、理科の教科書は買わずに人から借りて全部写したり、いつも勉強しているため、いつ寝ていつ起きたのか下宿の人もわからなかったそうです。

高等科を卒業すると山形中学校に進学し、その後、東京の第一高等中学校（一高）に入学しました。東京では「書生」として住みこみ、雑巾がけ、茶碗洗いなど厳しいしつけを受けました。次いで明治 30 年東京大学に進んで哲学・教育学を勉強、卒業の時は成績優秀により「恩賜の銀時計」を受賞し、大学院に進みました。

明治 34 年、文部省の国定小学修身教科書の起草委員となり、同 37～40 年に倫理学・教育学研究のためドイツ・フランスに留学、同 45 年に文学博士になりました。大正 5 年に東京帝国大学教授となり教育学講座を担当、昭和 9 年定年退職まで教員検定試験委員としても活躍し、わが国教育学の第一人者として教育界の指導にあたりました。また、大学退職後も国民精神文化研究所研究部長を昭和 18 年まで務めました。

昭和 20 年 4 月からは戦火を避けて中川の日影にある実家に疎開しました。この時、東京帝国大学の図書も一緒に運び、中川地区の人たちは中川駅から日影地区までこの図書運びに汗を流しました。図書は戦後に大学に戻され感謝されました。

熊次は疎開中も謹厳そのもので、毎日冷水摩擦や乾布摩擦を実行し、また決まった時間に散歩していました。その正確さに村の人たちは時計代わりになると言っていたそうです。

昭和 39 年熊次は天寿を全うして 91 歳で亡くなりました。

赤湯の旅館には、熊次が帰郷した際に書いた「懐嘗興老親共飲之夕」の色紙が額にして掲げられてあり、熊次の親への思いを語っています。



文・須崎寛二

平成 24 年 5 月 1 日号 市報なんよう掲載